

八幡宮神縁起

大友皇子神前御書之御書
御鎮座八幡宮神縁起本
之維昔人皇龍徳、天智
天皇御廿九年、庚午、夏、
吾人及皇子之御書、御書

皇子之御勸請也

本祭祀御神体者

葉田別尊

足仲彦尊

自長足姫尊

持統帝御宇辛酉卯年四月

癸卯月中大雨、企諸國、水

川鳴、王子隨身三國心人、

串之、給奉新入、辨余、

和歌山、

社殿大改、川鳴皇子、

並其形、成山、今現在、

王子之、

大御大明神、

常、

此、

因、

任、

賜、

武、

自、

大、

真、

野、

祀、

有、

本、

不、

天、

川、

所、

之、

天正十七年 宮司・川副式部允が兵乱記録散逸につき執筆した

八幡宮神縁起 (現・五箇神社)

八幡宮神縁起

そもそも淡海州(近江)神前郡(神崎郡)山之前郷に鎮座されている八幡宮神の由来は次のように伝えられている。人皇神武天皇から数えて三十九代である天智天皇の在位九年(六七〇)、庚午年夏(五月)大友皇子の弟である川嶋皇子(川島皇子)が勸請なさった。

まつられている神体は 菅田別尊・足仲彦尊・自長足姫尊である。

持統天皇の在位五年(六九一)辛卯の年、四月から六月中まで大雨がやまず、諸国で大洪水となった。川嶋皇子はお供の三國乙人薩が病氣になったので、ここ八幡宮で災害が除かれるように祈りをささげた。風雨はたちまちやんだ。諸民は喜んだ。これにより社殿を大きく改めた。川嶋皇子の墳は河重(川重)にある。その形は丸山になっている。今現在も、川嶋皇子の霊は石塚にまつり、正一位大御大明神と号した。川嶋皇子をはじめ、磐代(今の和歌山県南郡新宮町)におり、いつも松を愛でていたが、その後、当国の高嶋郡河嶋(今の高島市川島)に移した。それ故、川嶋皇子と称される。それからまた、御座所を川並に移したのである。

大友皇子は、天智天皇の在位のとときに、太政大臣に任命された。これが官の始まりである。天智天皇が亡くなり、その遺言により大友皇子は天皇の位を受け継ごうとした。そのとき天武天皇が吉野から出てきて、東国におもむき、兵を集めて、戦を挑んできた。ついに大友皇子は亡くなってしまった。今の太宰府藤原氏

天正皇子(二七五九) 己亥年。淡海真人三船は、当社八幡宮にとつて、大友皇子、与多王、葛野王、瀬野王の諸霊は、合祀を考えてよい者たちであると伝えて言った。

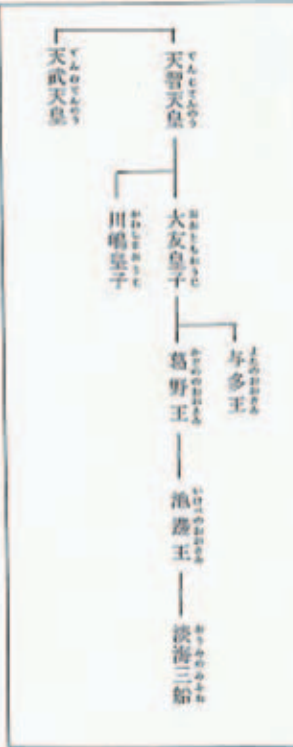
右は、兵乱のためまとまった記録が散りうせて、ここごとく詳細がわからないので、ここに大略を記した。後世のためになくならないよう、このとおりいう。

天正十七(一五八九) 龍集 己丑 秋

川副式部允

執筆する

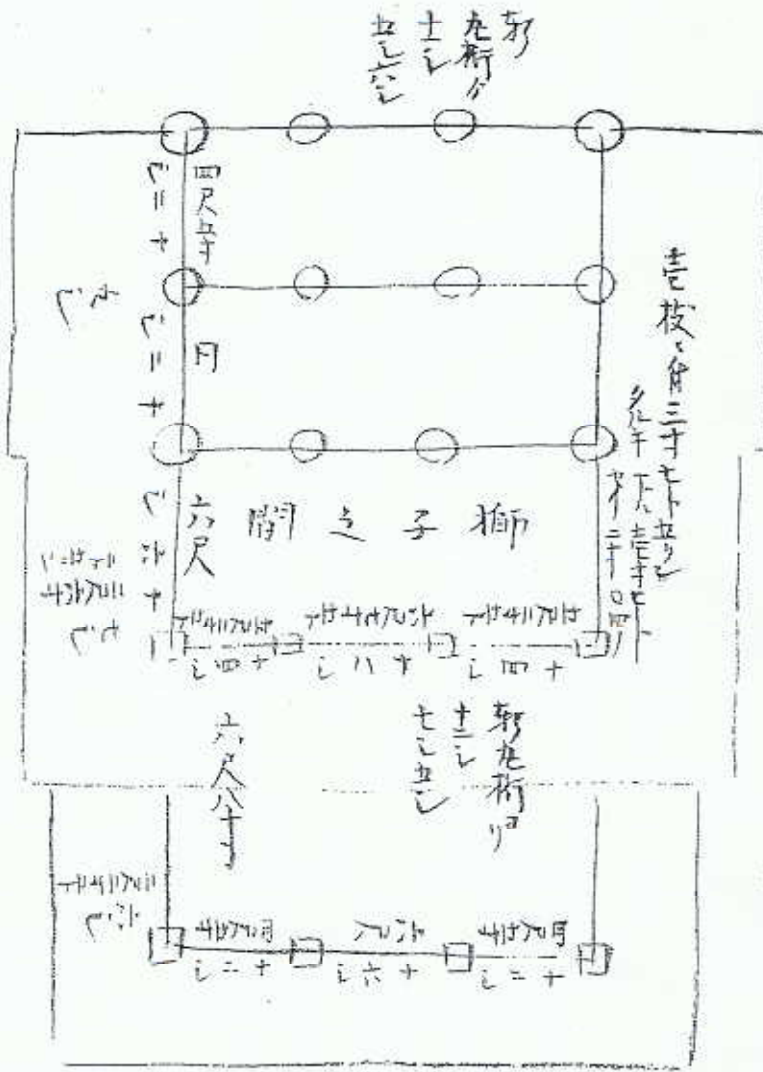
〔人物相関図〕



※ 大友皇子は淡海三船の曾祖父、与多王は大友皇子の子、葛野王は大友皇子の子で淡海三船の祖父、その子である瀬野王は三船の父である。

五箇神社本殿建設の古絵図面

天保九戌 戌七月 江島北之庄村三間社 扣 中仙道越川五



卷斗 平斗 四ト五
木口 四ト九ト五
ワク 三ト八ト半
ヤイ 三ト四ト
角ワク 三ト六ト
大斗 平斗 五ト
ヤイ 四ト半
角斗 六ト五ト四
カク九又ヤイ 卷斗下 五ト六ト半
江島北之庄 四ト四ト

- 一 柱九寸半ト九 一尾九寸半ト九倍
- 一 向縁柱 七寸半ト角 一丸折 七寸半ト
- 一 大床短 六寸半ト角 同板 三寸四ト
- 一 同頭買 四寸半ト下八寸半 三寸半ト半
- 一 小床 九寸半ト角 同板 三寸半ト角
- 一 長押 五寸半ト 同板 三寸半ト
- 一 大土直 五寸半ト 水及 四寸半ト
- 一 頭買 七寸半ト 二重 四梁 八寸半ト
- 一 表柱 三寸半ト 一モサレ 四寸半ト
- 一 羊長押 三寸半ト 養護 五寸半ト
- 一 小合 五寸半ト 同上 七寸半ト 三寸半ト
- 一 亀原高ヶ小床 見廻

伊藤平左衛門先祖代々

- 初代 伊藤平左衛門宗知
天正2年(1574)生、寛永18年(1641)11月8日没 行年68
- 2代目 伊藤平左衛門清入(兄)
慶長13年(1608)生、元禄元年(1688)8月9日没 行年81
- 〃 伊藤善左衛門宗円(弟)
元和6年(1620)生、元禄6年(1693)2月24日没 行年74
- 3代目 伊藤平左衛門源祐(俗名 萩 平左衛門)
慶安元年(1648)生、享保18年(1733)7月23日没 行年86
- 4代目 伊藤平左衛門玄道(俗名伊藤惣右衛門)
元禄4年(1691)生、延享2年(1745)10月19日没 行年55
- 5代目 伊藤平左衛門道房
正徳元年(1711)生、安永7年(1778)11月14日没 行年68
- 6代目 伊藤平左衛門義房
宝暦4年(1754)生、文政6年(1823)5月27日没 行年70
- 7代目 伊藤平左衛門義守(信濃、**守之**)
天明元年(1781)生、嘉永4年(1851)7月23日没 行年71
- 8代目 伊藤平左衛門守富(幼名 吉太郎)
文化11年(1814)生、明治10年(1877)5月25日没 行年64(文政元年生、行年60とも伝う)
- 9代目 伊藤平左衛門守道(幼名 陽一郎、後 平作、平右衛門)
文政12年(1829)生、大正2年(1913)5月11日没 行年85
- 10代目 伊藤平左衛門守明(幼名 吉太郎)
明治4年(1871)生、大正9年(1920)11月27日没 行年51
- 11代目 伊藤平左衛門正道(旧名 次郎)
明治28年(1895)生、昭和51年(1976)2月3日没 行年82
- 12代目 伊藤平左衛門^{4月27日}(嬰太郎)
大正11年(1922)生 *平成18年9月 没*

工学博士
伊藤 延 男

独立行政法人文化財研究所
東京文化財研究所名誉研究員
神戸芸術工科大学名誉教授

郵便番号二七七〇〇八二
千葉県柏市緑ヶ丘一九一八
TEL〇四一七七一六三一〇八六五
FAX〇四一七七一六三一〇八六五

伊藤 平左衛門さん

(いとう・へいざえもん)

〃 中部大学名誉教授、宮大工) 21日死去、81歳。通夜は24日午後6時、葬儀は25日午前10時30分から東京都港区高輪3の15の18の高野山東京別院で。喪主は妻光代(みつよ)さん。自宅は新宿区河田町11の12。

名古屋生まれ。東京帝大卒業後、社寺建築を手がけ、80年に、16世紀から続く宮大工の12世伊藤平左衛門を襲名。皇居大手門や浜離宮中島茶屋

の復元、出雲大社拝殿、永平寺納経塔の新築などを手掛けた。

16.7.24 A





※ 寛政重修諸家譜より(第7の339頁～)

寛政重修諸家譜卷第449 宇多源氏 佐々木氏庶流

川副=寛永系~~図~~川添

正俊より系を起こすといへども、今の呈譜のくはしきにしたがひいてこれをあらたむ。・・・とあり。

かつしげ

勝重 伊賀守 蒲生下野守定秀につかふ。

某 八郎左衛門 蒲生下野守定秀につかふ。

女子 孝蔵王と称し、豊臣太閤につかへ後東照宮のおおせにより江戸へ。正俊の子重次が養子に入る。

官荘沿革誌では野村主水正の長女とあり、勝重は野村姓となる。

某 弥兵衛 蒲生左近将監實隆につかふ。

某 式部丞 豊臣太閤につかへ山崎合戦にて討死す。

女子 青木三河守梵純が妻。

まさとし

正俊 源次郎 式部

川添の始祖

豊臣太閤につかへ、天正11年8月日近江国神崎郡の内にして160石を知行すべきむね判物をあたへられ、後秀頼につかふ。慶長19年に死す。法名宗因。

しげつぐ

重次 六兵衛 豊臣秀頼につかへ、大阪没落ののち徳川秀忠につかへる。

寛永3年叔母孝蔵王が養子となる。寛永13年9月24日死す。法名静雲。

しげかつ

重勝 権兵衛 六兵衛 徳川家光につかへる。明暦3年9月16日死す。法名專信。

しげより

重頼 六左衛門 金左衛門 母は市左衛門某が女。宝永2年7月20日死す。法名徹信。

よりかた

頼賢 大助 新右衛門 元文5年6月18日死す。法名頼賢。

某 源次郎 吉宗に拜謁す。享保9年4月8日父に先立ちて死す。年20。

女子

女子

よりつね

頼常 善次郎 金左衛門 実は榊原十左衛門某が二男。頼賢が養子となる。

よりやす

頼安 大助 安永4年8月7日死す。年41。法名浄源。

よりなり

頼功 新太郎 徳川家治にまみえたとまつる。

まさたけ

正武 八百之丞

某

千之丞

よりはる

頼玄 金之丞

よりのり

頼紀 勝三郎 寛政5年家を継。徳川家斎にまみえる。

官荘沿革誌では明治維新の時、川副勝三郎というのが居た。・・・とあり。



宮荘沿革誌より(12頁)

かわぞえひょうごのすけ

川副兵庫之助・・・辻伊賀守・宇野因幡守と共に北之庄3人衆のひとり。

妻 秀野 当村野村主水正の長女で、兵庫之助北之庄合戦(永禄3年=西暦1560年)にて討死の後、豊臣秀吉に仕へ、尼幸蔵主と言った。大阪落城後住居を旧里の当北之庄村に移す。

正俊 ? 秀吉に仕へる。・・・川添(副)の始祖と寛政重修諸家譜から推測される。

重勝 ? 徳川家光に召され、江戸本郷御茶水に於いて、邸宅と食邑7500石を受く。

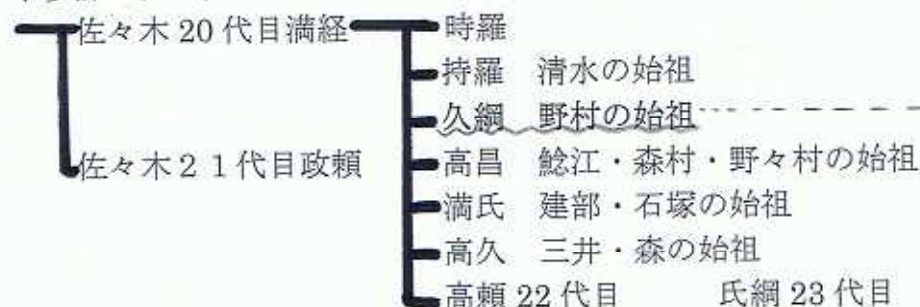
新右衛門 享保9年(=西暦1724年)川副金太夫が家を継ぎ、川副家は断絶した。XXX

野村より来るとあり。

明治維新の時、川副勝三郎というのが居た。・・・とあり。

野村主水正 佐々木17世満経二男久網の後裔。-----
元標(現大日堂前)の西村中にあり。
溝壕四周を囲み堤防も存在(現宮荘草の根グラウンド)。
北之庄合戦にて3人衆と共に討ち死にする。墳墓は小字大塚の田の中にあり。
長女の秀野は川副兵庫之助の妻女である。

宇多源氏佐々貴一家流々名字之分系(沙沙貴神社神主家蔵版)より



佐々木観音寺城 永禄7年(西暦1564年)落城。

落城後の当村の状況 当村の俗家へ落武者押し入り、金銀を奪い困惑する。
元亀元年(西暦1570年)当村が依頼した諸浪人は、
三上小太郎 北村 将監 藤井 相馬
小野伝十郎 高田等々
この後、野村金太夫い言う者野村より来るといふ。